

テンス・アспект



日语名词修饰句中 时态表现的习得研究

盛又渊 ◎ 著

南开大学出版社

浙江省高校重点学科“外国语言学及应用语言学”建设项目
浙江省“钱江人才计划”C类项目择优资助项目

日语名词修饰句中 时态表现的习得研究

(日本語名詞修飾節におけるテンス・アスペクト
表現の習得研究)

盛文渊 著

南开大学出版社
天津

图书在版编目(CIP)数据

日语名词修饰句中时态表现的习得研究 / 盛文渊著.
—天津: 南开大学出版社, 2013. 10
ISBN 978-7-310-04306-4

I. ①日… II. ①盛… III. ①日语—名词—态(语法)—研究 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 222857 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 孙克强

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

*

天津市蓟县宏图印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2013 年 10 月第 1 版 2013 年 10 月第 1 次印刷
210×148 毫米 32 开本 6.5 印张 2 插页 169 千字

定价: 18.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

目 次

第1章 序論	1
1.1 はじめに	1
1.2 研究目的と研究課題	3
1.3 本研究の方法論の特徴	4
1.4 本研究の構成	5
第2章 先行研究	7
2.1 第二言語習得研究の発展	7
2.2 テンスとアスペクトに関する先行研究	13
2.3 日本語の名詞修飾節に見られるテンスと アスペクト表現	22
2.4 本章のまとめ	42
第3章 調査A：名詞修飾節におけるル形とタ形の習得過程 —OPI 発話資料を基に—	43
3.1 はじめに	43
3.2 使用データ	44
3.3 分析方法	51
3.4 結果	52
3.5 考察	62
3.6 本章のまとめ	74

第4章	調査B：名詞修飾節におけるル形とタ形の習得過程—自然さ評定タスクに基づく	76
4.1	はじめに	76
4.2	研究方法	78
4.3	結果	81
4.4	考察	87
4.5	本章のまとめ	108
第5章	調査C：トキ従属節におけるル形とタ形の習得過程—OPI 発話資料を基に	110
5.1	はじめに	110
5.2	使用データ	111
5.3	分析方法	115
5.4	結果	115
5.5	考察	122
5.6	本章のまとめ	128
第6章	調査D：トキ従属節におけるル形とタ形の習得過程—多肢選択式テストに基づく	130
6.1	はじめに	130
6.2	理論枠組	131
6.3	仮説	138
6.4	研究方法	138
6.5	結果	142
6.6	考察	147
6.7	本章のまとめ	153

第 7 章 総合的考察	155
7.1 研究課題 1 に関する結果：調査 A と調査 B による 総合的考察	155
7.2 研究課題 2 に関する結果：調査 C と調査 D による 総合的考察	163
7.3 本章のまとめ	166
第 8 章 おわりに	168
8.1 本研究の日本語習得研究における意義	168
8.2 日本語教育への提案	169
8.3 今後の課題	170
参考文献	172
資 料	180
資料 1 第 4 章で用いた自然さ評定タスク及び「書き換え」 タスク	180
資料 2-1 第 6 章で用いた事前テスト	188
資料 2-2 第 6 章で用いた多肢選択式タスク及び筆記 インタビュー	194

第1章 序論

1.1 はじめに

動詞を中心に構成された名詞修飾節において、その動詞の形はル形とタ形のいずれかをとる。ル形とタ形はテンス・アスペクトの表現形式として、文末においては基本的に非過去(現在・未来)と過去のテンス的意味を表すが、名詞修飾節では未完了と完了というアスペクトの素性がしばしば前面化する。例えば、

(1.1) a. 友達が日本に来る／来た。

(非過去／過去)

b. 日本に来る／来た友達と出会った。

(未完了／完了)

しかし、名詞修飾節のル形とタ形は必ずしも未完了と完了のアスペクト的意味を表すとは限らない。(1.2)にあげた例文のように、テンスの素性(つまり非過去と過去の意味)が前面に出ている場合もあり、時制と関係なく被修飾名詞の属性や性質などを表す形容詞的な使い方もある。また、単文のテイルから転換したものもある。

(1.2) a. 明日から展示する絵はここに運びました。

(非過去)

- b. 京都でとった写真をお送りします。

(過去)

- c. 肉を食べる動物は牙が発達しています。

(時制性を持たない)

- d. この町には曲がった道が多いです。

(時制性を持たない)

- e. 会場には野球帽をかぶった人がたくさんいます。

(結果状態)

以上から分かるように、名詞修飾節における述語のル形とタ形の意味は複雑で多様である。寺村(1984: 194)は「連体修飾節をする動詞や形容詞におけるテンス、アスペクトの現われかたは、最も複雑で、きまりも微妙である。」と述べ、その複雑さを指摘している。従って、日本語学習者にとって名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現は難しい文法項目の一つであると考えられる。

90年代以降、第二言語としての時間表現の習得研究はテイルを中心に多く行われてきた(黒野 1995; Shirai & Kurono 1998; 許 2006 など)が、その多くが文末におけるテイル形に関する研究である。名詞修飾節中のル形とタ形の習得研究はまだ非常に少ない。一方、日本語の名詞修飾節に関する習得研究は「関係節の接近可能性階層(Noun Phrase Accessibility Hierarchy: NPAH)」と「知覚難易度仮説(Perceptual Difficulty Hypothesis: PDH)」の観点からの研究が主流であり、テンスとアスペクトの観点から名詞修飾節の習得状況を考察したものは大関(2004, 2008)、許(2006b)など少数にとどまっている。そこで、本研究はル形とタ形に焦点をあて、中国語母語話者による日本語名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現の習得過程を考察する。

1.2 研究目的と研究課題

日本語の名詞修飾節は、後続の名詞が実質的な名詞、形式化した名詞、そして文末で形式用言と合して助動詞化するものがある(寺村 1984)。本研究は、まず被修飾節が実質的な名詞である場合、いわゆる典型的な名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現の習得過程を研究する。前節で見たように、名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現は複雑で多様である。本研究はル形とタ形の多様な意味用法の習得順序及びそれに影響する要因を明らかにしたい。

次に、本研究は形式化した名詞「とき」に導かれた従属節(以下、トキ従属節と呼ぶ)中のテンス・アスペクト表現の習得過程を分析する。トキ従属節の特徴として、時間関係は典型的な名詞修飾節と比べてより前面化することが挙げられる。トキ従属節における述語のル形とタ形は、その時間関係は従属節の基準時間と主文との時間関係の二つの観点から観察できる。基準時間の相違によって、ル形とタ形は「絶対テンス」「相対テンス」「絶対＝相対テンス」の三種類に分けられる。そして、従属節と主文との時間関係は同時関係と継起関係がある。本研究はトキ従属節中にある絶対テンス・相対テンスとしたル形とタ形の習得過程を明らかにし、習得に影響する要因を探りたい。

以上のことから、本研究は二つの研究課題を設定し、それに関して四つの調査を行う。研究課題1、研究課題2及びそれに関する調査A、B、C、Dの詳細は表1.1のとおりである。

表 1.1 研究課題1、研究課題2 及びそれに関する調査

研究課題1： 名詞修飾節中のル形とタ形の意味 用法の習得順序を明らかにする。		研究課題2： トキ従属節中のル形とタ形の 習得状況を明らかにする。	
調査 A	表出課題：OPI 発話資料	調査 C	表出課題：OPI 発話 資料
調査 B	理解課題：自然さ評定タ スク 内省課題：「書き換え」 タスク	調査 D	理解課題：多肢選択 式テスト 内省調査：質問回答

1.3 本研究の方法論の特徴

中間言語の全体像や習得過程を捉えることは、単一の調査だけでは困難である(迫田 1998)。調査方法の違いによって、要求される中間言語知識のレベルが異なると考えられる。例えば、発話調査は言語産出レベルの知識が必要で、文法性判断テストは言語理解レベルの知識が必要だと思われる。近年第二言語習得研究の分野で、複数の調査により日本語の習得研究を行うものが多くなってきた(迫田 1998; 奥野 2005; 許 2006a; 大関 2008 など)。本研究はこれらの研究と同様に複数の調査方法を用いて習得過程を研究する必要があると考え、表出課題、理解課題、内省課題の三つの課題により、多角的に考察していきたい。まず、公開されているコーパス(発話資料)を利用し、言語産出能力を考察する。そして、文法性判断タスク/多肢選択タスクにより、言語理解能力を考察する。最後に、「書き換え」タスク/質問回答タスクの内省調査により、学習者の内心的な考え方を探り、より客観的に分析結果及びその要因を解釈する。

習得研究の調査手法として、横断研究と縦断研究がある。横断研究は量的な調査方法で、多くの被験者から言語発達の各段階の言語

資料を収集し、短期間で習得プロセスを検証できる方法である。それに対して、縦断研究は少人数の被験者を対象にし、一定の期間の言語実態により中間言語の習得プロセスを究明する質的な調査方法である。本研究は集团的に資料を収集する横断研究の手法をとり、学習者の習得状況を考察する。縦断研究は今後の課題にしたい。

1.4 本研究の構成

本研究の構成は以下のとおりである。

第1章では、本研究の研究背景、研究方法及び二つの研究課題を示す。第2章では、第二言語習得研究の発展、テンスとアスペクトに関する先行研究、日本語の名詞修飾節に関する言語学研究与習得研究の順で本研究に関わる先行研究を概観する。

第3章の調査Aと第4章の調査Bは研究課題1に関する調査である。第3章では、OPI発話資料を基に表出調査を行って、名詞修飾節中のル形とタ形の意味用法の習得順序を明らかにし、その結果に基づき習得に影響する要因を検討する。第4章では、自然さ評定タスクの理解課題を行い、名詞修飾節中のル形とタ形の意味用法の習得順序を再検討する。同時に、「書き換え」タスクの内省調査を行い、競合する言語形式の有無が意味項目の習得困難度に影響しているかどうかを検討する。

第5章の調査Cと第6章の調査Dは研究課題2に関する調査である。第5章では、OPI発話資料を基に表出調査を行い、トキ従属節中のル形とタ形の習得状況を明らかにし、その結果に基づき習得に影響する要因を検討する。第6章では、多肢選択式テストの理解課題を実施し、「系統的変態モデル」と「競合モデル」の適用可能性を検討する。同時に、質問回答の内省調査を行い、習得に影響する要因を検討する。

第7章と第8章では総合的な考察を行い、本研究の習得研究における意義、日本語教育への提言及び今後の課題を提示する。

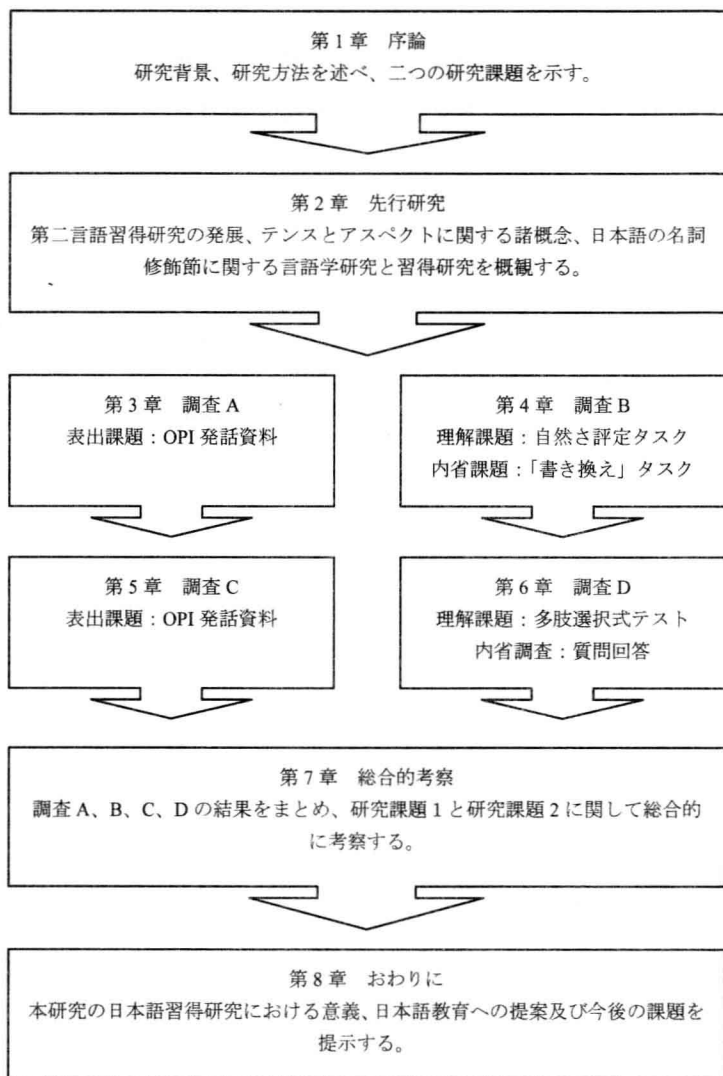


図 1.1 本研究の全体構成

第2章 先行研究

本章では、第二言語習得研究の発展、テンスとアスペクトに関する先行研究、日本語の名詞修飾節に関する言語学研究と習得研究の順で本研究に関わる先行研究を概観する。

まず、「中間言語」を中心に、第二言語習得研究の理論の変遷を概観し、本研究のアプローチである「認知的アプローチ」を紹介する。次に、「絶対テンス」「相対テンス」「語彙的アスペクト」「文法的アスペクト」「完結相」「非完結相」といった本研究で用いるテンスとアスペクトに関する諸概念を簡単に紹介し、日本語の文末に見られるテンス・アスペクト表現の意味用法をル形、タ形、テイル形を中心に述べる。最後に、日本語の名詞修飾節に見られるテンス・アスペクト表現に関する言語学研究と習得研究をまとめる。

2.1 第二言語習得研究の発展

2.1.1 第二言語習得研究の理論の変遷

1) 対照分析研究(Contrastive Analysis)

1950～1960年代まで、第二言語習得研究の分野では、行動主義心理学と構造主義言語学に基づいた対照分析研究が盛んに行われた。「対照分析仮説(Contrastive Analysis Hypothesis: CAH)」はLado(1957)が提唱した習得モデルであり、母語と目標言語との相違が第二言語を習得する際の困難領域だとされ、言語間の距離が遠ければ遠いほど習得が難しいとされた。このモデルでは学習者

の誤用が母語からの干渉に起因するとしていたため、二つの言語を対照的に分析することにより、第二言語習得の難易度が予測できると考えられた。

しかしながら、研究が進むと、発音以外の誤用の大部分が学習者の母語に由来しないということが明らかになってきた。また、実際に対照分析によって予測される項目では誤用が生じなかったり、予測できない誤用が現れたり、異なった母語の学習者から同様の誤用が起こったと報告された (Dulay & burt 1973; Schachter 1974 など)。このように 70 年代に入ってから、実証的研究の結果に従ってが明らかになるにつれ、対照分析への批判が次第に高まる一方、新たな習得研究方法である誤用分析研究が急速に広まっていた。

2) 誤用分析 (Error Analysis)

対照分析研究が盛んであった 60 年代後半、Corder (1967) が論文「学習者の誤りの重要性 (The significances of learners' errors)」を発表して学習者の誤用の重要性を指摘したことにより、第二言語習得研究が誤用分析へ移行していった。対照分析と誤用分析の根本的な違いは学習者の誤用に対する見方である。対照分析では、誤用は母語の干渉から生じるもので、ドリルなどの訓練を通して排除すべきものだと言われた。一方、誤用分析ではそれまで全く意味のなかった誤用を研究対象にし、言語習得の必然な産物と考えられた。

しかし、誤用分析は徹底的に学習者の誤用を分析しようとしているが、実際に誤用の判定、分類の基準、原因の分析、回避のストラテジーの使用など様々な問題を抱えている。また、誤用分析は学習者の言語総体のほんの一部分である誤用のみに焦点を当てるので、習得研究としてはかなり不完全だと言える。このよ

うに、誤用分析の導入が第二言語習得研究史に斬新な一ページを開いたが、習得研究は次第に新たな中間言語研究へと移っていった。

3) 中間言語研究 (Interlanguage)

第二言語習得研究の本格的な始まりは Selinker(1972) が提唱した「中間言語仮説 (Interlanguage Hypothesis: ILH)」の登場であろう。中間言語は母語でも目標言語でもない、両者の中間に位置する学習者独自の言語体系を指している。この理論は誤用分析から生み出されたが、学習者の言語が体系的であると主張し、誤用だけではなく正用と学習者言語の変化の過程などの研究を含んだ習得プロセスに焦点を置いている。

Selinker(1972) は、中間言語の形成に影響を及ぼす要因として、以下の5点を挙げている。

- (2.1) a. 言語転移 (language transfer) : 学習者の母語(または既習の言語)が第二言語の習得過程に及ぼすなんらかの影響。
- b. 過剰一般化 (overgeneralization) : ある言語規則を広く一般化し、適用できない項目にまで適用すること。
- c. 訓練の転移 (transfer of training) : 教師の指導や練習など教室学習の弊害による負の影響。
- d. 学習方略 (learning strategy) : 学習を成功させるための学習者の具体的な行動と態度。
- e. コミュニケーション方略 (communication strategy) : 言語能力が不十分な場合、コミュニケーションをスムーズに進めるために、学習者が身ぶり、回避、コード・スイッチングなどの手段を使用すること。

同じ時期に、他の研究者からも相次いで学習者には特有な言語体系が存在すると議論された(Corder 1971; Nemer 1971 など)。中間言語研究において、中間言語の概念は研究者によって「学習者独自の規則体系」と、「学習者の規則体系が目標言語に近づいていく中間言語連続体」の二つの意味として解釈されている。山岡(1997)は、これまで発展してきた中間言語の特徴を以下の6点にまとめている。

- (2.2)a. 体系性：ある時点において構築する中間言語の規則は体系性を備えている。
- b. 浸透性：中間言語の体系は不完全で流動的であり、新しい言語形式や規則及び、学習者の母語の浸透を受ける。
- c. 遷移性：中間言語の連続体は、浸透性の結果として、絶えず訂正されてゆく。
- d. 普遍性：中間言語の体系は普遍的な言語的制約に従った体系であり、母語の影響は少ない。ただし、母語の影響をすべて排除するものではない。
- e. 変異性：ほぼ同一時点の同一个人の中間言語において変異がみられる。
- f. 化石化：中間言語の体系には化石化が伴う。

(山岡 1997: 75-76)

以上、欧米言語を中心とする第二言語習得研究の理論の変遷を歴史的な観点から概観した。日本語の習得研究においては、海外の発展に遅れて誤用の分析が長く続いたと長友(1993)が指摘した。近年以来、中間言語研究も活発に行なわれ、研究成果が相次いで出された(長友 1991; Sasaki 1991; 迫田 1998; 大関 2004; 奥

野 2005 など)。本研究も中間言語の立場に立ち、学習者の習得プロセスに注目して研究を進めたいと考える。

2.1.2 認知的アプローチ

前節で概観したように、第二言語習得研究は概ね「対照分析研究」「誤用分析研究」と「中間言語研究」の三つの理論段階を通して発展してきた。今日に至って、第二言語習得研究分野では、さらに「生得的アプローチ」「相互交流的アプローチ」「認知的アプローチ」「社会文化的アプローチ」など様々な研究アプローチが広がっている。ここでは、本研究のアプローチである「認知的アプローチ」を紹介して論議を進めていきたい。

1) スキル習得モデル

Anderson (1983, 1985) は認知心理学の影響を受け、「思考の適応性コントロール (Adaptive Control of Thought: ACT)」というモデルに基づいたスキル習得論を提唱した。この習得モデルでは、学習者が持っている知識を「宣言的知識 (declarative knowledge)」と「手続き的知識 (procedural knowledge)」に分け、前者は内容を記述できるような言語構造の知識であり、後者は無意識的に何かができる知識であるとしている。

このスキル習得モデルの基本的な考えは、学習者はまず宣伝的な知識を習得し、経験をつむにつれて、次第に手続き的知識に移ってゆくということである。つまり、第二言語習得のプロセスは、まず文法の規則を学び、練習を重ねることで、言葉の使用を意識的に使う段階から無意識に表現できるようになっていく過程であると考えられている。